
きみとスマイル

橘。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きみとスマイル

【NZコード】

N0107J

【作者名】

橋。

【あらすじ】

誰にも言えなかつた。でも、わたしはずつとこんな仲間が欲しかつたんだ。

たまたま友達の茜と学校の帰り道に通りかかつた土手で、泉は茜の幼馴染、大吾からスケートボードの助つ人を頼まれる。

けれど大吾はライバルの手前、助つ人が女である事を隠そそうとして・・・。

1・泉

「なにいいいい……！」

五月晴れのすがすがしい青空の下、気持ちのいい風が川辺を流れしていく。川岸の向こう側を眺めれば、しまい忘れた鯉のぼりがその風に乗って揺れている。その穏やかな景色にそぐわない少年の叫びが五月の風に乗って響いた。

川原に作られた広場には10人前後の小学生達が集まっている。それぞれ思い思いの格好をした同い年ぐらいの少年達だ。彼らの共通点と言えば皆スケートボードを持っていることだろうか。先程大声をあげたのはその中の一人だった。

「またかよ！今度は何だつてんだ！」

叫び声の主である少年が怒りも露に声を荒げた。黒髪を短く刈ったその少年は怒りの為か、握り締めた拳を震わせている。彼の足元には彼のものであらう赤いスケートボードが無造作に置かれていた。

「お腹が痛いんだって。」

興奮する少年を田の前に、青い帽子をかぶった細目の穏やかな顔をした少年が答えた。どうやら、この少年のこういった姿には慣れているようだ。

すると、少年達の中で一番体の大きくこつい感じの少年が前に出た。小学生にしては大きな体をした少年だ。その風体にふさわしく、腕組みをして勝ち誇った顔で、未だ落ち着かない様子の黒髪短髪の少年にくつてかかった。

「で、どうなんだよ、大悟？」のままだと俺達の不戦勝だぜ。つまり俺達の23勝目って事だ。」

しゃべり方も小学生にしては偉そうだ。

「うるさいな、ゴリ！ 第一、なんで23勝なんだよーまだ22勝だろー。」

ゴリの一言によつて、大悟の怒りが増幅してしまつたようだ。だが、その方向性は180度変わつてしまつている。

「はあ！？ 何言つてんだ！ 23でいいんだよー。」

前触れもなく始まつた一人の、実に子供らしい口喧嘩によつて、より公園内が騒がしくなる。だがその喧騷の中で他の少年達はまたか、といった表情で一人の様子を見守つていた。
周りにとつてはいつもの喧嘩という訳だ。

「本当は20勝なんだけどね。」

二人の会話を聞いて、その様子を遠巻きに見ていた黒髪の大人っぽい顔をした少年が落ち着いた様子で呟く。

「秀ちゃん。よく覚えてるね。」

おそらくもう誰も覚えていないであろう戦績を聞いて、隣に居た青い帽子の少年が本気で感心した。この少年はいつの間にか大悟の隣から秀という少年の隣に移動している。大悟とゴリの喧嘩に巻き込まれない為だ。

避けはするが、喧嘩を止めはしない。だが、それはこの少年だけではない。誰もが大悟とゴリの喧嘩を止めようとせず、遠巻きに見ているだけだつた。

秀は帽子の少年を振り返つた。

「どうする浜田？ また4対4でやるうか？」

浜田は当然、といった顔でそれに答える。

「そうだね。」

「ゴリも不戦勝とか言つといて結局勝負するんだから、いちいち同じ事繰り返すなよなあ。」

秀と浜田の会話を聞いて、ボードの上に座つてゐる茶髪の少年が呆れたようにこぼした。

「まあ、いいじゃん、浩太。一人の喧嘩はいつもの事だし。」

浜田が右下に田線を落とす。その顔には言葉とは裏腹に、浩太への同意が現れている。

「そうだけど。しかし強哉の病欠はこれで何回目だ？」

「5回目。」

またもや秀が落ち着いた声で溜息混じりに答えた。その表情はの大悟やゴリと違つて小学生らしくなく、どこか達観しているようだ。

「5回も病欠かよ。完全に名前負けだなアイツは。そのせいで俺、3回も審判やらされてるんだぜ。」

浩太は座っているせいで自分よりも高い位置にある秀の顔を見上げ、不満そうに口を尖らせる。それに対して、秀は表情を変えずに浩太の方を見た。

「それは浩太がジャンケンで負けたからだろ。」

「はいはい。いいよな、秀は。今まで全部出てんじやん。お、終わったみたいだぜ。」

三人が大吾とゴリに向けると、浩太の言う通り一人は言い争いを止めていた。大悟とゴリは無言でそれぞれ皆の居る方に向かって歩き出している。だが、それも一瞬の静寂だ。せつかくの静寂をゴリの小さな不満の一言がぶち壊しにしてしまう。

「またこつちは4人かよ。」

それを聞いた大吾は勢いよくゴリを睨み付け、我慢できずに再び感情を顕に言い返した。

「つるせえなーもう一人連れてくればいいんだろ！……ちょっと待つてろ！」

そう言ってゴリをひと睨みし、大悟はゴリの隣から皆の方へ駆けて来ると、声を大にして仲間を集めめた。

「南小集合！」

大悟の号令に従つて、彼の元に集まつたのは3人だ。その中には浜田も居た。浜田は大悟のこの行動には驚いたらしく、困ったように大悟をいさめる。

「大ちゃん。あんな事言つたって南小にもうスケボー出来る奴はないだろ?どうすんだよ。」

「だから、それは・・・・・。捗すんだよ。」

勢いで言つたは良いものの、やはり自分でも無茶だと分かっているようだ。その言葉は自信なさ気に小さくなっていく。

「今まで散々探したけどいなかつたじゃないか。」

「そうだけどよー。」

浜田がそう言つのも無理はない。現在の小学生でスケボーをやる子供はとても少ないからだ。今はローラーブレードやローラー付シユーズもあり、何よりスケボーは危ないと止める親が多い。塾や習い事をする小学生が多くなっているのもその原因の一つと言える。

大吾たちの通う南小も例外ではない。幼い頃、幼馴染の大吾と『』の面倒を見ててくれた近所の中学生がスケボーをやっていたのをきっかけに、小学3年生の頃から一人はスケボーを始めた。当時は一人の他にスケボーをやつたことのあるものは居なかつた。しかも二人の家がちょうど南小と西小の学区の境目にあつたため、大吾は南小、ゴリは西小に通つていたのだが、お互いに同じ学校にスケボーをやるものは居なかつたのだ。そこで、二人はスケボーを出来る者を探し、やつたことの無いものには教えたりして仲間を集めた。

それが現在の仲間である。南小側、つまり大吾の仲間は浜田、強哉、小太郎、ヤス。西小側、ゴリの仲間は秀、浩太、広、ホリーの5人だ。昔からライバル心むき出だつた大吾とゴリは、初めはどちらがより仲間を集められるか勝負していたが、どちらも5人ずつで限界だと知ると、今度は5対5のチームのリレー方式でどちらが速

いか勝負をするよつになつた。その戦歴は通算48回勝負して、南小21勝、西小20勝、7引き分けなのである。

だが、最近困つたことに南小のメンバーの一人である強哉がよく体調を崩すようになつてしまつた。しかもいつも、勝負の日に限つてなのである。強哉も決してわざと避けているわけではないのだが、大悟にとつては大きな問題だつた。

リーダーの大悟が答えの出ない難問に頭を悩ませている時、聞きた声が上方からかけられた。

「あ、大ちゃん！」

それは嬉しそうな女の子の声だつた。南小の皆が声のした方を振り返ると、河原の土手の上に作られた道の上で一人の女の子が大吾達の方を見下ろしていた。肩までの黒髪を一つにくくり、ピンクのスカートをはいた女の子と、長い髪をたらし、ジーパンをはいた背の高い女の子だ。おそらく学校帰りなのだろう。二人の背には赤いランドセルが背負われている。声をかけてきたのはピンクスカートの子だ。こちらの少女は皆の顔なじみだつた。

「何だ、茜かよ。」

一人目の幼馴染に大吾はどうでも良いとばかりにそつけなく答えれる。その態度を気にした様子もなく、茜は土手の坂を下りて、皆の下に笑顔で駆けてきた。

「あ、ゴリちゃんも。もしかしてまたスケボー？」
「やうだよ。なんか用か？」

茜の満面の笑顔にも相変わらず大悟は仏頂面だ。

「何よその言い方。大ちゃん達がいるのが見えたから声かけただけでしょ。」

茜と大悟がケンカしそうな雰囲気に、今度は放つておくわけには行かないのか、浜田が話題を変えようと慌てて二人の間に口を挟む。

「あ、茜ちゃん。うちの学校でスケボー出来る奴知らない？」
「やめろよ。浜ちゃん。茜が知ってる筈無いだろ。」

浜田の気も知らず、茜に聞こえるように大きな声で大吾が抗議する。浜田も大悟の言葉に困った顔をするが、茜から返つて来た答えは一人の予想とは違うものだった。

「知ってるよ。」「えっ！？！」

誰もが諦めていた中、南小の皆が驚きの声を上げる。その反応に茜も驚きの表情を見せた。

「何だよ。知つてんなら何でもっと早く言わないんだよ。ちょっと、こっち来い。」

大吾は茜の腕を掴んで皆の傍から離れた。茜は不服そうな顔をして、大悟についていく。だが、実際茜は大吾にかまつてもらえるのが嬉しいのを大吾、「ゴリ以外の皆が知っていた。

「で、誰なんだ。早く言えよ。」「うん。でも・・・・。」

「なんだよ。」

焦っている大吾は苛立ちを隠せない。だが、茜はその心を知つてからはずか、なかなかその人物を言おうとはしなかつた。言つてもいいのか迷つているようだ。

「今メンバーがいなくて困つてるんだよ。」

「そりなんだよ、知つてるなら教えて欲しいんだ。」

浜田が一人の後を追つて話しに加わり、フォローに回る。茜は困つたような顔で上田使いに大悟の表情を見ながら口を開いた。

「言つてもいいんだけど、多分皆の仲間にはならないよ。」

「なんだよそれ。そんなの訊いてみなきや分からぬいだろ。」

いい加減我慢できないようだ。大悟は後ろのゴリたちを横田で気にしながら茜を促した。

「だつて、絶対大ちゃん嫌がるもん。」

「なんでだよ。嫌がらないから言つてくれよ。」

いつもは「んなに短気ではない大吾も、西小のメンバーを待たせてることや、ライバルの目もありいつも以上にイラついていた。それを感じ取ったのか、観念したように茜はとうとう白状した。

「女の子なの。それでもいい?」

その言葉を聞いた南小メンバーは全員黙り込んでしまつた。さすがにその答えを予想する事は出来なかつたようだ。男同士の勝負に女を入れることは大吾が一番嫌がると皆分かっているからかもしれ

ない。茜は居心地が悪そうに大悟を見つめている。

南小メンバーの視線が答えを求めるように大吾に集まる。

「どうするの？ 大ちゃん。」

急に黙ってしまった大悟に浜田が念を押してみる。その顔を見ればわかるように、大吾はかなり迷っているようだ。メンバーを探すといった手前、大吾の性格上後には引けないし、だからといって女をメンバーに入れたら「ゴリに何を言われるか分かったものではい。大吾は「ゴリ達の方をちらりと見る。いつのまにか西小のメンバーは少し離れたベンチに座つて、適当に話していた。

大悟は茜に視線を戻す。

「茜。」

「何？」

さつきまでとは違い落ち着いた大悟の声に、茜は顔を上げた。

「そいつは今すぐ来れるのか？」
「うん。」

茜は後ろを振り返る。

「だつてあの子だもん。」

茜の指差す先にいたのは、茜と一緒に居た女の子だ。今も土手の上で茜の話が終わるのを待っていた。
彼女を見る南小の皆の顔は疑問に満ちている。誰も彼女のこと知らないようだ。

「あの子誰？」

ヤスが茜に聞いた。ヤスは『ゴリの次に背の高い痩せ型の少年だ。癖のある髪を短く刈つている。

皆がいぶかしがるもの無理はなかつた。南小は3クラスしかないため、5年間も同じ学校にいて見たことのない生徒がいるのは珍しい。

「うちのクラスに一昨日転向してきた子なの。白崎泉ちゃん。」

「転校生か。どうりで見たことないとと思つた。」

皆の目が白崎に集まり、そして再び大悟に向けられた。

「お、ほんとに連れてきたみたいだぞ。」

浩太の言葉に西小メンバーが大吾達の方に目を向けると、確かに五人揃つていた。強哉の代わりのメンバーは皆が見たことのない、背が低めの帽子をかぶつた子だった。

(あの帽子って、浜田の帽子じゃないのか?)

秀だけがそのことに気付く。

その考えは当たつていた。助つ人の彼がかぶつているのは浜田の帽子だ。

白崎泉に助つ人として参加して欲しかつたが、女であることを知

られたくなかった大悟は、浜田の帽子を彼女に顔が見えないようにかぶせ、事情を話して男子のフリをしてもらつことにしたのだ。

女を仲間にした事を知られたらゴリにまた何か言われると思ったのだろう。少年独特の変なこだわりもその行動に至らしめるのに一役買つているのかもしれない。

ここまでは意地つ張りの大悟ならやうなことだと皆思つていてに違いない。その証拠に誰も反対しなかつた。

意外だったのは、嫌がると思っていた白崎泉があつさうそれを承諾したことだ。

「おい、誰だよそいつ。」

「ゴリの突然の質問に皆が一瞬動搖する。大悟が苦しげに口を開こうとした瞬間、意外にも先に答えたのは白崎泉だった。

「5年の白崎。」

その日、幸いにも泉はジーパンに長Tシャツというラフな格好で、帽子で顔も隠れている。まだ声変わりをしていいない子も多い小学生では泉の声を聞いても、女とは誰も疑わなかつた。

ゴリが何も疑問を持たなかつたことで、南小の皆は胸を撫で下ろす。大悟は強がって、どうだと言わんばかりに勝ち誇った表情を浮かべて見せた。だが、その内心はバレないかという不安でいっぱいに違ひない。

南小は上手く乗り切つたように見えたが、大悟のタンカを実行できるわけないとついていたのと、大悟の勝ち誇った顔を見て、ゴリは素直にその助つ人を認めるわけにはいかなかつたようだ。またも腕を組んで威嚇するように前に出ると、いぶかしげな顔で泉のこと

を観察する。

「本当にそいつがスケボーできんのかよ。」

南小のメンバーは当然誰も泉が滑っているのを見たことがない。その為誰もそれに言い返すことはできず、顔を見合わせるばかりだ。大悟も先程とはうつて変わって、不安を隠せない顔で自分の隣にいる泉の横顔を見る。

その沈黙を破ったのはまたも泉だ。

「できるよ。ビリしたら信じる?」

「へえ、そうだな。じゃあ、タイムアタックだ。3分切れたら認めてやるよ」

言いながら、ゴリは勝ち誇った顔で小柄な泉を見下ろす。その言葉に南小も西小も皆が驚いた。

「3分!? はじめて走るコースなのに速すぎるだろ。」

「ゴリのその提案にヤスが抗議の声を上げた。

彼らの言うコースとは、もちろんスケートボード用のコースなどあるわけないから、公共の道路を使って彼らが勝手に決めたコースのことだ。スケボーの音が五月蠅いとか、誰かにぶつかってしまって怪我でもさせてしまったら、すぐに親にスケボーを止めさせられてしまう。その為、スケボーで滑れる道路の内なるべく人通りの少ない場所を選んで構成しているのである。

ゴリの言っているそのコースは短めのタイムトライアル用で、その大体平均タイムが3分30秒。このメンバーの中で、そのコース

を3分切れるのは大悟、ゴリ、秀、ヤスだけなのだ。
だが、またも意外な答えが泉から返つて来た。

「分かつた。」

皆が呆気に取られるほど、あっさりと泉は承諾した。そんな彼女の表情は青い帽子のつばの下に隠れて誰も見ることはできない。

浜田が適当に拾った棒切れで地面に図を描きながら簡単にコースの説明をする。泉は浜田の隣にしゃがんでその説明を聞いていた。その一人を不安そうに周りが見守る中で、説明を聞き終えて立ち上がる泉に茜だけが気楽に声をかける。

「がんばってね。」

「うん、久しぶりだけどうやってみるよ。」

他の者的心境など知らずに穏やかに会話する女子一人。南小のメンバーは、特に大悟は泉の正体がバレないかハラハラしているというのに。

「もういいか。やるぞ。」

「ゴリの一言で、全員の目が泉に注がれた。

スタートは皆の居る広場の上に位置する土手の上の舗装された道で、現在泉の立っている所のすぐ横には電信柱が立っている。それ

がいつも使っているスタートの位置の田印だ。

泉が大吾のボードを借りてスタートの準備を終える。ストップウォッチは秀が持ち、合図はゴリが行うことになった。他の皆は邪魔にならないよう土手の下からその様子を見ている。

「行くぞ。」

「ゴリの短い確認に泉は頷く。

「用意。」

それを合図に泉の姿勢が低くなる。左足はボードの上。右足は道路をけるためにかかとが浮き、つま先に力が込められる。上半身は力を抜いた状態で構えられた。田線は真っ直ぐ先を見つめている。

「スタート！」

ジャツツ

力強く道路を蹴ると、土手の上をボードが滑り出す。土手の上は平らな為、泉は右足で道路を蹴り続ける。土手を住宅街の方へ下りて右に折れる。すぐに泉の姿は住宅の間に消えた。

秀がストップウォッチを見つめている。

大吾達にできることはただ、祈ることだけだ。

やつと広場に静かな午後が訪れる。誰もが泉の疾走する姿を思い浮かべ、一言も話さずに泉が出てくるであろう住宅街の出口の方を見つめている。

その中で、茜だけがベンチの上で暇そつこランドセルを抱えてで

足を「ブラブラ」させていた。

2分。

まだ泉の姿は見えない。3分以内にゴールするためには遅くとも2分30秒以内には住宅街を出て、土手のストレートのコースに出なくてはならないのだ。

2分10秒。川の音だけが聞こえてくる。

2分20秒。一台のスクーターが通り過ぎる。

2分22秒。皆の目に浜田の青い帽子と大悟の赤いボードが写る。間違いない、泉だ。皆泉から田を離さない。

2分28秒。土手のコースに乗り、一直線で「ひかり」を田指し走行していく。

(スピード)のってるな。これならもしかして……

手元のトップウォッチを見ながら秀が思う。大悟は屈ても立つても居られず、勢い良く土手を駆け上がり、秀に並んだ。無言でトップウォッチを覗き込む。

「秀、カウントしてくれ!」

思わずヤスが叫んだ。田は泉を見つめたままだ。

秀のカウント以外皆に聞こえるものは何もない。

「2分40秒。41・42・43・・・」

皆の眼に映る泉の姿がボードの音と共に大きくなる。皆、内から
こみ上げる興奮を抑えられず、知らず内に手に汗握っている。

だが、

「だめだ、間に合わない。」

秀のカウントを聞きながら、小太郎がつぶやく。

すでに45秒を切つているが、ゴールとなるのは土手を降りた皆
のいる広場。滑り降りてそこに着くまで10秒はかかる。このま
だと、間に合わないのは目に見えていた。

「白崎！..45秒切つたぞ」

大悟が泉に向かつて大声で叫ぶ。それが聞こえたのか、泉は皆に
分かるか分からいかぐらい小さく頷いた。
その頷きは何を意味しているのか。

泉は土手を下り始める位置まで来ると、勢いに乗ったスピードそ
のままに左折し、思い切り右足を蹴った。

だが土手にスケートボードのタイヤはついていない。あるのは影
だけだ。

誰の口からも声は聞こえない。
皆の目線は上だ。

泉は飛んでいた。

皆が宙を見上げる。

泉は太陽を背にしていた。逆光で泉を見る皆の目が細められる。

空中を飛んでいるのである。土手の上から思いきりジャンプしておよそ3mの距離を飛び越え一気に下まで辿り着く。着地地点、広場の土の上にタイヤの跡を残し、土煙を上げながら勢いを殺してカーブする。そしてそのままゴールに向かつて直進した。

秀のストップウォッチが時を止める。

誰もしゃべらない。

同じ年の子供のこれほどのジャンプを見たのは皆初めての経験だった。それほど泉のジャンプは高く、長く、そして美しい弧を描いていた。

「タイムは？」

泉のその声を合図に、止まっていた時が動き出したかのように皆その目を秀に向ける。

秀が手元に目を落とす。その表情からは結果は読み取れない。皆静かにその言葉を待つた。

「・・・2分56秒」

秀がタイムを告げると、皆の顔に笑顔が浮かんだ。

再び広場が騒がしくなる。それは陽が落ちるまで続いた。

2・健一

「白崎……」

学校の廊下に大悟の声が響く。

今は授業間の休憩時間。南小学校、6年生のクラス前の廊下だ。

「大ちゃん。」

そう言つて振り返つたのは白崎泉だ。その隣にはいつものように茜が居る。

泉と茜はあの時以来、すっかり親友となつていた。二人は音楽室からの帰りなのだろう。その手にはそれぞれソプラノリコーダーと音楽の教科書が握られている。

「今日の放課後空いてるか？」

「今日? 空いてるよ。」

それを聞いて大悟の顔が更に明るくなる。

「よし、じゃあいつもの所に集合な。」

そう言いながら大悟は泉の肩を叩いた。だが、それを見て茜が不機嫌な声で大悟に聞き返す。

「今日もスケボー やるの?」

「茜には関係ないだろ。」

最近、茜はスケボーの話になると機嫌が悪い。そのことに泉はそ

れとなく気付いていたが、大悟は気付かずに無神経にも茜の言葉を跳ね返した。

「分かつた。行くよ。」

二人の様子を見て、泉は慌てて返事をした。

「よし。由崎ならそういう風うつと思つてたんだ。じゃあ、学校終わつたらすぐ来いよ！」

「うん。」

その会話を打ち切るように次の授業開始のチャイムが鳴る。

「じゃあな！」

大悟はそのまま廊下を6年1組の教室に向かつて走つていった。茜と泉はそれから無言のまま3組の教室に戻る。自分の席に座つて茜の方を見ると、やはり茜は不機嫌な顔をしていた。

茜はまだ本音を言つてくれないが、泉は茜の気持ちは分かつていた。茜は泉が大悟と一緒にスケボーをやることが嫌なのだ。単純に言えば嫉妬である。茜のことを考えれば、大悟たちとスケボーをやることを控えるべきかと思うが、スケボーが大好きな泉にはそれも出来なかつた。

泉は幼い頃からずっとスケボーをやつてきた。しかし、近所にスケボーをやる子はいないし、しかも泉は女だ。スケボーといえば男がやるものだし、やつても自分よりもずっと年上の人しか居なかつた為、スケボーをやるとときはいつも一人だつた。

友達と一緒に遊ぶには他の子の遊びに合わせねばならず、段々ス

ケボーをやる機会が減つていっていた。

だが、泉はスケボーを辞めなかつた。初めて滑つた時の爽快感と開放感。泉はスケボーで風を感じるのが大好きだつた。泉は他の子供達との遊び以外にも時間を作つて一人でスケボーを続けていたのだ。

親の仕事の都合でこちらに越してきたのだが、泉はそれで良かつたと思つてゐる。ここには大悟達という仲間がいるからだ。

あの日、大悟が助つ人でスケボーをやってくれと言つた時、どれだけ嬉しかつたか。それでも人見知りをする泉は、その時素直にその気持ちを話すことができなかつた。けど、その後何度も大悟たちに誘われるようになり、すっかり泉も仲間となつていた。

あのコースでのタイムトライアルの他に、障害物越えや、チーム対抗のリレーなどもやつた。いつも皆で速さや技術を競い、教えたり、教えあつたりして自分が上達していくのは泉にとつても仲間達にとつても嬉しいことだつた。

リレーでは泉が入れば南小チームは負け無しになり、特に大悟が喜んでゐる。最近では西小・南小関係なくチーム別けをして競つたりもしているのだ。

けれど相変わらず、大悟とゴリのライバル心は絶えることなく競つてゐる。

だが、そんな彼らにも変わつたことが一つある。それは6年生になつて、中学受験のため小太郎が一時辞スケボーをめる事になつたのだ。泉が入つて6人になつたメンバーは再び5人に戻つてしまつた。

いつになつたら茜は自分に本心を話してくれるのだろう?・泉は最

近よその事が頭をよぎる。大悟は茜の気持ちには気が付いていないし、一人の仲はしばらく変わりそうにない。

黒板を見ている茜を離れた窓側の席から見ながら、泉はそんなことを思つていた。

いつもの公園。泉はいつものように帽子をかぶつてゐる。もちろん、スケボーをやる時の為に買った帽子で、もう浜田の帽子ではない。まだ、ゴリ達には泉の正体を隠したままなのだ。学校も違うし、バレることなく今日に至つている。

だが、ゴリ達にも仲間として認めてもらえたようになつてから、泉は自分の正体に嘘をついていることに小さな罪悪感を感じるようになつっていた。

しかし、本当のことを言つては抵抗がある。それは今まで嘘をついていたことを皆が許、女である自分と一緒にスケボーをやってくれるかという不安。茜のことを加えて、これが泉の持つている二つの不安であった。

まだ、公園には誰も集まつていない。

「早かつたかな？」

やつづぶやくと同時に、大悟たちが来た。

「あれ、白崎早いな。・・あ、あいつまだ来てないじゃんか。」

大悟は西小メンバーがないのを見るとそう言った。

「何だよあいつら、自分達から呼び出したといで。」

「あれ、今日はあっちが集まつて言つたの？」

浜田が慌てて、大悟の後を追いかけながら言つ。その後ろにはヤスと強哉もいる。強哉は最近、体調を崩す事も無いようだ。

「お、来きてんな。」

「ゴリが西小メンバーを連れてきた。約束の時間に遅れて來たことは少しも気にしていないようだ。いつものように不遜な態度で現れたが、いつものメンバーの他に知らない顔が一人混じっているのに皆すぐに気が付いた。

「おせえよ。」

当然の事ながら、そんなゴリに大悟はいつも悪態をつく。だが、いつもと違つて、ゴリは表情を変えずにその悪態に応える。

「しょうがないだろ。今日こそは絶対俺達が勝つからなー」「へつ？ 今日は何すんの？」

こきなりなゴリの言葉に思わず強哉が聞き返す。

「あ？ 言つてなかつたつけ？」
「言つてないよ。」

ゴリのボケに突つ込んだのは南小のメンバーではなく秀だった。

「リレーだよ。今日は新しいメンバー連れてきたんだぜ。」

「ゴリがそう言つと、皆が一番後ろに立つていた男子を手招きする。皆の後ろから現れたその男子はやけに前髪が長く、ハタから顔をよく見ることができない。見た感じは謎だ。

「ゴリが強引にその男子の肩を抱く。

「ふつふつふつ、」こいつが俺達西小の秘密兵器だ！もへ、こいつがいる限りお前らには負けん。今日は覚悟しろよ！」

「なんだと。」

案の定、大悟が挑発に乗る。とこりより大悟だけが挑発に乗るといつた方が正しいようだ。

そんな二人を他所に他の南小メンバーは気楽にその秘密兵器に話しかける。

「へえ、スケボーできるなりもつと早く一緒にやればよかつたのに。」

「

フレンドリーな浜田が真っ先に話しかける。

「俺、今田西小に転向してきたんだ。」

「へえ、転校生なんだ。白崎と一緒にだね。」

そう言つて浜田は泉を指し示す。秘密兵器が泉の方を向いた。泉は帽子に田を隠しているため、田を合わせることはなかつたが、その秘密兵器と仲良くなるべきかどうか迷つていた。

仲良くなつても仲間が増えるたびに自分の中の不安が増えるだけではないのかと。

昔は欲しくてしょうがなかつた仲間が、今泉を不安にからせてい

る。だが、泉はそこを抜けられない。孤独を知っているからだ。夢のために孤独を選ぶことは、まだ11歳の泉にとつてはとても辛い選択だった。それ故に、不安から身動きが取れないでいた。

泉は秘密兵器に向かつて歩き、一言声をかける。

「南小、6年の白崎。よろしく。」

「俺は葛西健一。」

「健二って言うのか。健二はいつからスケボーやってるんだ。」「小2。」

仲間達が、まだ言い争つてゐる「ゴリと大悟を尻目に健二を中心として会話を始める。その会話の輪の中にはながら、泉はどこか外側に居るような疎外感を感じていた。それは自分から作った疎外感だつた。

白崎を一人の仲間が見てゐた。その少年は知つてゐた。白崎が感じてゐる疎外感、仲間に入つてゐるようで入つていらない状態。なぜ白崎がそう感じてゐるのかの原因。気付いてゐるけど、立場上それを言つわけにはいかないのだ。白崎を見ているその彼は、最近特に白崎を良く見ていた。

「いいか、今日は絶対負けるわけにはいかないからな。」

やつと「ゴリとの口喧嘩を終えて、興奮冷めやらぬ大悟が南小メンバーにそう言った。今日の勝負は南小、西小で分かれてのリレー。リレーの順番は、大悟、強哉、浜田、ヤス、泉。対して西小は「ゴリ、ホリー、浩太、秀、健二だ。

「特に、白崎。お前はあの西小秘密兵器と直接対決だからな。絶対

抜かれんなよ！俺達は白崎の為になるべく差をつけて白崎にバトンタッチするんだ。」

「はーい。」

いつものように大悟は「ゴリにのせられて熱い指導をするが、他メンバーは淡々としてる。

「今まで作戦会議してんだよ。始めるぞ。」

「ゴリが早くやろうと言わんばかりに野次をふっかける。だが、西小側の表情を見れば分かるように、向こうでもやはり熱くなっているのはゴリだけのようだ。

「分かつてるよ。」

大悟が言い返すと同時に、皆自分の位置につくために移動した。

勝負の方法はいつもと同じ5人のリレー方式。コースはスタートの位置から一人目が人気のない住宅街に入る。長い上り坂を上がると二人目に交代し、真っ直ぐ伸びた道を西に走る。そこから舗装されていない土むき出しのでこぼこ道を通り、抜けた所で三人目に交代する。三人目は住宅街の中にある小さな公園まで行き、公園の中のベンチなどの障害物を越えて小さな坂を下りる。四人目は三人目が坂を降りたところで交代し、住宅街の一画一画をギザギザに走行する。大通りに出たところで五人目に交代し、大通りから河原に向かつて真っ直ぐに伸びた下り坂を一気に走行し、川原に突き当たった所で、再び川原の中の広場に向かつて土手を走行する。そして先に元の広場に着いた方が勝ちである。

公園には一番手の大悟・ゴリと、健二が入ったため余りになつた西小の広が審判として残る。

広の合図と共に、二人がスタートした。

「ねえ、それ前見えてんの？」

泉と共に五番手のスタート地点である大きな下り坂に向かって歩いていた健一が、突然そう言った。

「人の」と言えるの？」

泉は冷静に健一の前髪を指して言つた。

「俺は見えてるよ。」

「へえ、そう。」

「」の話題を早く打ち切りたい泉はそつけなく会話を終わらせる。

「あ、」
「」

いつもの位置に二人が着く。

「せういえば、あの中で誰が一番早いの？」

「・・・タイムで言つと、自分かな。」

「ふーん。じゃあ負けられないな。」

今まで何を考えているのか分からず、ひょうひょうとしていた健

「が初めてはつきりとした感情を見せる。健一も年頃の男の子らしく負けず嫌いな部分を持っているらしい。」

「健一は前どおりに住んでたの？」

「東京。」

「東京は、スケボーやってる奴つていうぱいいるの？」

「一人はこつでもスタートできるように道に並んで会話を交わす。

「やつてる奴なら結構見かけるけど、同じ年では全然いなかつたな。」

「そりなんだ。」

「どことはなしに前を向いたまま泉は答えた。健一は泉を見ながら言ひ。

「そりいえば、お前・・・白崎も転校して来たんだつけ？」

「うん。前は千葉にいた。」

「スケボーしたい時つてどうしてた？」

「一人で公園行ってやつてた。」

「やっぱり？俺もそう。ここみたいに小学生でスケボーやってる奴がこんなにいるのって珍しいよな。」

「うん。」

「ま、俺達みたいな奴にとつてはありがたいけどな。」

「うん。」

泉は心からその意見に賛同した。やはり仲間がいるのは嬉しい。

「ソレに来れて良かった。」

初めて、泉はその言葉を口にした。ずっと心で思っていた言葉。健一なら同じように思っているのではないかと思つたから。

「そうだな。」

泉の予想通りの言葉が返つてきた。泉の予想と違つていたのは、その言葉が、こんなにも自分を喜ばせたということだ。

泉の心は嬉しくて泣き出してしまいそうな気持ちと、早く健一と走つてみたいという気持ちでいっぱいだった。今まで感じていた孤独感はどこにも姿を見せない。

だが、それと同時に湧き上がる小さな罪悪感には気が付かないフリをした。

「あれ？」

健一が突然声を上げる。健一は曲がり角の先の下り坂を見ていた。

「何？」

「俺達はこの坂を下つてくんだよなあ？」

「そうだよ。」

「一スはすでに、」が説明している筈だ。

「でもこの道工事中になつてるぜ。」

「えつ？」

健一に言われるまま、角を曲がつて下り坂の先を見てみると、確かに工事をしていた。水道工事のようだ。道には工事の車と進入禁止の看板が立てられ、これではこの道を使つことは出来ない。

「他に道ないの？」

「その一つ先の角を曲がって下れば行けると思つたが。」「じゃあそつちに変更だな。」

そう言つと、すぐにスケボーの音が後ろから聞こえてきた。二人が同時に振り返ると4番手のヤスと秀がこちらに向かっているのが見える。二人の間にそれほど差はないが、秀が1メートルほどリードしていた。

「来たな。」

健一が嬉しそうな声で一人を出迎える。言葉には出さなかつたが、わくわくしているのは泉も同じだつた。

「行け！」

秀はそう言って健一に向かつて手を伸ばしバトンタッチする。同時に健一は右足を蹴つて飛び出した。

それを横目に泉は手を伸ばしたままヤスを待つ。少し遅れてヤスが泉にバトンタッチした。

「悪い！ まかせた！」

「まかされた！」

短くヤスの言葉に答えると、泉も先を行く健一を追つて飛び出した。目は真っ直ぐに健一の背中を見つめている。だが、健一がここで滑るのは初めてだ。それを考えれば、泉が追いつく隙もある。

いつものコース通り過ぎて、目的の一つ先の角を曲がる。そこにはひとつ前の道と同じようにトライ坂がある、筈だった。

健一に追いついたと、泉は少しもスピードを緩めずに角を曲がった。

だが、その先にあったのは坂道ではない。

階段だ。

「えつー。」

思わず泉は驚愕の呻きをもらす。だが、泉よりも先を行っている健一を見て、さらに驚くことになる。

健一は階段の部分と石造りの垣根の壁の間にある排水用の溝にボードの左側のタイヤを乗せ、外壁の部分に右側の2つのタイヤを乗せて、ボードが斜めの状態で器用にそこを降りているのだ。

(私にあればできない。)

一瞬の迷いを捨て去り、泉は覚悟を決める。

健一は泉がどうやってこの階段を切り抜けるのか気になり、階段を降りきった時に後ろを一瞬振り向いた。

そのままが驚愕に開かれる。

泉は階段をジャンプして一気に下りようとしていた。その体は階段の上を通り過ぎ、そのまま下へ下降する。

(無茶だ。あのままじゃ、壁にぶつかるー。)

階段を下りた4m先は外壁がある。ジャンプし、無事着地してもこれだけの距離では失速しきれず壁に衝突してしまつのは誰の目にも明らかだ。

「おー・・・」

思わず健一は止まって声を出す。だが、その日の前で健一の予想外のことが起きた。いや、予想外の事を泉が起こした。

泉のボードが前輪から着地する。惰性だが、ボードはすさまじい勢いで壁へ向かって吸い込まれていく。だが、壁へ衝突する寸前、泉は後輪に体重をかけて無理やりタイヤを止め、前輪を浮かせて体ごと右を向かせることによつて、ボードはけたたましい音を立てて方向を90度転換した。しかし、それでも勢いを殺せずに、ボードは壁に対して水平になつたまま、壁へとぶつかりそうになる。

鈍い音が一回聞こえた。

それがなんだつたのか、分かつたのは事が起つた後だ。外壁についた靴跡と上げられた左足によつてその結果を知る。泉は衝突しそうになつた外壁を足で蹴つて、その衝突を逃れたのだ。見事に向転換し、階段を無事に下りた泉は、止まって泉を見ていた健一を一瞬の内に抜き去つっていく。

目に飛び込んできたのは会心の笑顔。それを見て、健一は我に返る。

「やられた！」

そう言つた言葉とは裏腹に健一の顔には嬉しそうな、楽しそうな、無邪気な笑顔が現れていた。

土手の上の最後の直線。泉の前には健一がいる。

階段を越え、その後の下り坂までは泉が先行していた。しかし、広場へ戻る土手の上の平坦な直線コース。そこで泉は健一に抜かれてしまったのだ。何の障害のない直線ではあまり個人差は出ないため、そこで抜くことは難しい。しかし、それを健一はやつてのけた。

後、二人に残されているのはゴールのある広場へ土手を降りるだけ。この直線で抜けない以上、泉が健一を抜くチャンスは無い。だが、泉は健一にこれ以上はなされまいと必死にくらいにつきながらも、健一を抜くチャンスはないか頭をフル回転させていた。

「おい！ 来たぞ！」

浩太の声に皆が一斉に反応する。

「健一が前だ！」

「ゴリの嬉しそうな声が皆の耳に届く。それとは対照的に、大悟の表情は厳しい。

健一の2mほど後ろに泉は居た。健一と泉の場所からも、広場のゴール前に皆がいるのが見えた。途中、二人の横を自転車が通り過ぎたが、二人を減速させるには役不足だ。ぶつかったならばお互いに転倒しかねないそのスピードに、自転車の主は通り過ぎた瞬間、手に汗握つたことだらう。現に自転車を止め、驚いた顔で止まらない二人を見ている。

ゴールまで後8m。さらに、泉の足に力が入る。

皆の声が二人の元に届き始めた。だんだんと声が大きくなり、それが応援だと気づいた時には両者を応援する声が次々と押し寄せてくる。その中に怒号にも似た大悟と「！」の声が混じっているのに気付いて、泉は思わず噴出しそうになつた。

後、5メートル。

健一が振り返つて泉の位置を確認する。すでに一人の差は1メートルほどに迫つていた。

4メートル。

泉は勝負を仕掛けることを決意する。残されたコースで泉にできるることはただ一つ。

3メートル。

後は広場前までの河原の芝を下るだけ。健一がボードを右へ方向転換し、その下りに入る。下りによつてボードは下がつていぐが、芝生によつてその勢いを殺されながら真っ直ぐに健一はその距離を消化していく。

健一が土手を2mほど降りたところで、泉も土手へ向かつて方向転換する。だが、泉は少し下がつた。

「まさか、あいつ・・・。」

泉の様子を見て、秀の口から眩きが漏れる。

泉の先を行く健一の頭上に影がさした。

泉だ。

泉はそこでジャンプした。一年前に見せたジャンプと同じものだ

つた。

健一とは対照的に、一気に最後の3メートルを縮めていく。

健一が土手の坂を下り切り、泉が着地する。そこから最後の加速をかけて、二人は「ゴールへと疾走した。

ストップウォッチを持っている広の手が、時を止めるボタンを押すために大きく下に向かって振られる。

一人の荒い呼吸だけが聞こえる中で、健一が勝敗の結果を求めた。

「・・・ど・・どつちだつた？」

広はストップウォッチを持った手をゆっくりと持ち上げ、その数字を読み上げた。

「8分23秒。同時だつた。」

それを聞いてぐつたりと一人の力が抜ける。健一は芝の上に仰向けになり、泉は思わず座り込む。

「なあーんだ・・。」

その気の抜けた泉の言葉を合図にしたように、緊張の面持ちだった皆の顔が崩れ、笑い出す。

それにつられて健一がひときわ大きく笑い、泉も、下を向いて小さく笑つた。

それから、健一は正式に大悟たちの仲間に入り、幾度も一緒に滑つたり、戦つたり、争いながら過ごしていた。その間も泉の正体はバレることなく、また健一の素顔をまともに見た者はいなかつた。

だが、そんなことを気にならぬよつた楽しに毎日。その日々を重ねれば重ねるほど、泉の罪悪感は少しづつ少しづつ降り積もる雪のように重くなつていつた。

「泉ちゃんは」のままでいいの？」

いきなりの質問に言葉が出ない。

校舎裏の日陰のベンチに座った泉と茜の手には、スケッチブックと鉛筆が握られている。現在、二人のクラスは美術の授業中。絵のテーマは学校。6月とは言え、直射日光はもう暑い。二人は校内の涼しいポイントを見つけてスケッチをしている所だった。

「なんのこと?」

質問の意味を予想しつつも、それが顔に現れないように気をつけながら、泉は気付かないフリをして訊き返した。

「大ちゃん達のこと。男の子だって、嘘ついたままでいいの?」「・・・・・」

泉は校舎を描いていた手を止める。茜の顔を見ることができず、目線はスケッチブックに落としたままだ。

どうしてそんなことを聞くんだね?。
どうして今なんだね?。
どうして

茜に対する疑問が次々と浮かんでは消えていく。泉の心の中に言いようのない不安がゆっくりと広がる。それとは対照的に、鼓動はどんどんと速まっていった。暖かくなっていく気温とは関係なく、

汗が泉の手のひらをじっとじっと濡らす。

「茜ちゃんは……。」

口に出したが一旦言葉が詰まる。すぐに口にしたことを後悔したが、外にしてしまった以上、そのまま何も言わない訳にはいかなかつた。一度出かけた言葉は形を変えて隣の親友へと投げかけられる。

「茜ちゃんはどうした方がいいと思う?」

「……あたしは、辞めた方がいいと思う。」

一呼吸置いた後、茜もスケッチブックから田を離せずに泉の言葉に答えた。

泉は不安の為か、恐怖の為か、体は金縛りにあつたように動かなくなる。茜の表情を見るのが恐かったのかもしれない。体の奥から冷えていくような感覚に襲われた。だが、何とか言葉を吐き出す。

「どうちを?」

その言葉を受けて、弾けた様に茜が泉の方を向く。その顔に葉明らかな動搖が見える。だが、スケッチブックの上の未完成の校舎を見つめている泉はそのことには気付かない。茜の声を聞くまでは。

「……ひ、嘘をつく」とぞしょ?」

しばらく間をあけた後、茜はそつそつと、気まずそつとまたスケッチブックに目線を戻した。

「うん。そうだね。」

沈黙は二人に一體どんな答えを『えるのか。お互にそれを知ることはできない。

泉には茜の言いたい事は分かつていて、茜が望んでいるのは泉が大悟の仲間から外れること。その理由は茜の大悟への想いにある。それを否定するつもりはないし、応援しているつもりだ。

不安定な少女の心は、他の女の子が好きな人のそばに居るという状況を受け入れられる程、余裕のあるものではない。例えそれが応援してくれている友達でも、特に茜はずつと昔から想いを抱えてきたのだから。

泉はずつとこの一択を迫られていた気がする。どちらも失いたくない想いが、答えを出すのをずつと先延ばしにしてきた。けど、とうとう逃げられないところまで来てしまった。茜か大吾か。親友かスケボーか。どちらかを必ず選ばなければならない事に泉の心は沈んでいる。何より茜が今まで触れようとしたしづた答えを自分から求めているのだ。今度は避けることはできそうにない。

そのまま就業のベルが鳴るまで、二人は何も言わずに校舎のスケッチを続けた。湿気を含んだ風が一人の間を流れていく。梅雨の訪れを予感させるその風は、二人の沈黙を誤魔化すように木々を揺らして音を立てた。

学校からの帰り道。泉が歩いている場所は大悟達とリレーをやる時に使用するコースの近くだ。いつもこの道は下校の時には通らな

い。そしていつもと違う所はそれだけではない。下校の時は一緒に茜の姿は、今彼女の隣にはなかつた。

あの時から茜と気まずくなつてしまつた泉は、普段、皆が下校に使わない道を選んで歩いていた。それは茜と下校中に会いたくないことの表れだつた。

泉は自分の足を見ながら、おぼつかない足取りで人気の無い道を歩いている。

（私は、辞めたくない。でも、辞めなければ茜ちゃんはずつと嫌な思いをする。何で、好きなことをやることがいけないんだろう。私が大ちゃん達とスケボーを続けたら、茜はなんて言つかな？絶交されるかな？）

何度も考へても一人では答への出ない問題だ。けれど、

（辞めたくないよ・・・・）

泉は小学校六年生。だが、普通の小学六年生よりも大人の部分を持つていた。大人の泉は茜のことを考へて、もうスケボーは辞めた方が良いと思つてゐる。だが、歳相応の子供の部分は好きなことをやり続けたいと思つてゐる。

いつでも大人が正しいとは限らない。だが、他人の事を考へられるのが大人だ。子供は自分の要求に対して素直だが、それだけを貫けるほど泉は子供ではない。けれど自分の思いを人の為に殺せるほど大人でもない。泉はその狭間で苦しんでいた。

家に帰る為には遠回りになるこの道の、いつもと違う景色を楽しむこともなく泉は歩き続ける。

だがそれが、偶然を呼ぶ事となつた。

「白崎？」

聞いたことのある声が泉の後ろからかけられる。だが、泉は振り返ることができなかつた。それは、聞いたことがあるからこそ拒否しなければならなかつた。

振り返つてはいけない、と。

「じめん。俺知つてるんだ。白崎だろ？」

その言葉に驚きを隠せない。

心臓は鼓動を速め、金縛りのように動けなくなる。まるで自分のものではなくなつたかのように動かない体を、泉は動搖した顔のままゆっくりと後ろに向けた。

そこに立つていたのは、秀だ。

今の中はもちろん秀達といつも会つていた格好ではない。普段の学校の帰り。スカートに赤いランドセル。どう見ても女の子にしか見えない格好をしているのだ。それなのに、秀は泉に呼びかけた。そしてさつきの言葉。

それが一体何を意味しているのが、泉は考えたくなかった。

その内心は沈黙となつて現れる。

「やつぱりそうだ。」

秀は少しだけ微笑んだ。

いつもと同じ秀の様子に、なぜか泣きそうなる。

いつの間にか泉は不安を口にしていた。

「・・・皆は？皆知っているの？」

その時、泉の中に在ったのは何だったのだろうか。その時の表情はまるで見えない恐怖を感じているようだった。少なくとも、秀はそう感じだ。だから、

「皆は知らないよ。気付いたのは俺だけ。・・・ごめん。」

謝る事しかできなかつた。

「ちょっと、話がしたいんだけどいいかな？」

リレーで第3走者が使用する障害物がメインの小さな公園。そこにあるブランコに一人は座つている。だがいつも子供達を楽しませているその遊具は、今は動いてはいない。元々ここは利用者の少ない公園だ。だからいつもリレーで使用されているのだが、今二人の他には誰も居ない。

「いつから気付いてたの？」

どこかうつろな表情で泉は左隣にいる秀に話しかけた。声は心なしか小さく、その目は足元を見つめている。

秀は少し躊躇つた後、答えた。

「白崎が初めて俺達の所に来た時。白崎がタイムトライアルしただ
ろ？」

「初めから気付いてたの？」

意外な答えに泉は驚きを隠せないまま、顔を上げて秀を見る。まさかそんな早くからバレていたとは思つてもみなかつた。

「うん。『一』直前の白崎のジャンプの時、俺土手の坂の所に座つてたんだ。下から白崎を見上げて、その時顔が見えた。」「皆には言わないで…」

思わず泉は立ち上がり、叫んでいた。その勢いで、ブランコが音を立てて揺れる。

今にも泣きそうな顔を見て、秀は言葉を失つた。泉を見つめる秀の目は段々と怪訝なものになる。

「どうして？」「
「だつて…。」

秀は泉と目を離さぬまま、確認するようにひくつと言葉を紡いだ。

「俺は、俺は白崎が最近悩んでる」とも知つてゐよ。茜ちゃんの事だろ？」

「…。」

泉は言葉が出てこない。秀の言葉を肯定する事は、何だが茜を裏切ることになるような気がした。

「茜ちゃんが大悟のこと好きなのは多少、皆知ってるよ。『一』は

知らないだらうけれど。茜ちゃんは分かりやすいからね。茜ちゃんがどう思つてゐるか俺には分からぬけど、俺は眞に本当にことを言つべきだと思つ。白崎が女だと知つたつて、眞は今更怒つたりはないなによ。」

「違うの。やうじやないの……。」

泉はすがるような目で秀を見る。その目は媚びる為ではなく、秀への苦しげまでの嘆願が込められていた。

「あたしが、眞に、言つて……。それで眞が私を許してくれたとしても、茜ちゃんは……。あたしは、茜ちゃんが大事なの。茜ちゃんが、もし……もし望むんだつたら、あたしは……。」

泉は秀の誘惑から逃れるよつて硬く口を開じる

「眞と一緒に居るので、辞めてもここと思つてる。」

それを聞いて秀の表情が変わつた。同時に秀もプランから立ち上がる。

秀の口調が少し責めるよつたものに変わつた。

「本当にやう思つてこるもの?」

返事の代わりに泉は小さく頷いた。

「やう……。それもアリだとは思つけど……。」

秀はじつと泉を見る。今日の泉の表情は秀にひとつ初めて見るものばかりだ。けど、それは当たり前の事だった。今まで、帽子の下に隠れた白崎の顔を見た者は誰も居ないのだから。

秀は泉から一度田線を外して一つ溜息をつき、しばらく田を闊じて、再び泉の顔を見た。だが、泉は苦しそうに瞼を下ろしていた。

「分かつたよ。でも、俺は白崎とこれからもスケボーをやりたい。それは俺だけじゃなくて皆も同じだ。」

秀はそれを言つことで泉が困るのは分かつていたが、それでも口にした。自分の願いを込めて。

その言葉は泉の心に深く染み渡つたが、泉の心を軽くしてくれるものではなかつた。

泉は瞼を開いて、苦しみに満ちた瞳で秀を見る。

「「めん。」

もう、秀は謝ることしかできなかつた。

泉は小さく首を横に振る。

「帰るね。」

やつと聞こえるくらいの小さな声で別れの言葉を言つて、泉は公園を後にした。

泉の姿が見えなくなるまで、秀はずつとその後姿を見つめていた。泉が見えなくなると、ゆづくつと再びブランコに腰を下ろした。

(やつと念えたのに・・・)

待ち人に会えた喜びよりも、自分が責めてしまつたのかも知れないという不安が残る。何かしてあげたいけど、何もできないことに気付く。

秀もブランコから降り、公園の出口に向かって歩き出した。

「は？ なんで？」

「『めん、用事があつて。』

いつもの学校の廊下。いつもの休み時間。そしていつもの大悟の誘い。いつもと違うのは、それを泉が断つたことだった。

「そつか。じゃあ、しようがねえな。」

大して気にした様子もなく、大悟は自分の教室に戻つていく。泉の隣には、驚きと罪悪感を湛えた茜の顔があつた。

「ねえ、泉ちゃん。今の・・・。」

泉は茜の顔を見て、笑いながら言った。

「ほんとに用事があるの。」

その表情と言葉に、茜は安堵した。
心から。

「そうなんだ。」

茜も笑顔を見せる。いつも見ていた茜の笑顔だが、何だか久しづりに見るような気がした。茜の笑顔を見て、泉は自分の選択が正しかったことを確認する。

(もう、大丈夫……。)

心の奥に置き去りにした想いを無視して、泉は笑つた。

部屋は静かだ。

いつもなら大吾達と河原の広場にいる頃だが、泉は自分の部屋のベッドの上で仰向けになつていた。

(暇だなあ。)

今更ながら、一人では何もする事が無いのに気付く。

茜はいつもこの時間何してるんだろう。今頃、学校の友達と一緒に遊んでいるのだろうか。今まで、他の女の子達が何をしてるのかなんで気にしたこともなかつた。これから放課後遊ぶのだとしたら、女の子達と遊ぶことになる。だが、いつも一緒に遊んでいない泉を誘つてくれる子はいない。

何だが、一人だけ取り残された気分だ。

天井を見つめていた目が、部屋の一角で止まる。そこには、いつも使つている緑色のボードが壁に立てかけてあつた。

何だがいたまれなくなつて、泉はベッドから降りる。ボードの所まで行くと、見えないようにそれを押入れの中にしまつた。

そのまま、ランドセルを持ち上げて、ペンケースと今日出た宿題

を取り出す。それを勉強机の上にひろげて椅子に座った。

何かをしていなければ、スケボーのことばかり考えてしまう。それをおさえる為だった。

「えつ、来ないの？」

大悟の言葉に、健一が答える。

「なんか、用事があるんだってよ。」「なんだ。つまんねえな。」

健一はすねるようにならうと言った。「ここにいる誰もが、泉がここに居ない事に何の疑いも抱いていない。きっと、明日になればまた一緒にスケボーができると思つてている筈だ。

秀以外は。

秀は大悟の言葉を聞いて、やはりと思つ。それを顔に出しはしないが、嫌な感情が広がる。

それは悲しみだろうか、寂しさだろうか。それとも、悔しさだろうか。

多分その全てだろう。

泉が抱えているものへの悲しさ、泉が居ない事への寂しさ、そして、それを知つていながらも何もできない自分への悔しさ。

（何かしたい。）

自分の周りで楽しそうに話す仲間を田の前に、秀は悩んでいた。だが、誰にもこの事を話すことはできない。泉の為に、茜の為に、自分の為に。

(何かしたい。)

その答えはきっと仲間の誰も持つてはいないだろ。だからこそ、

秀は悩むのだ。

秀は空を仰いだ。

まるで、そこに求めている答えが書いているかのように。

「どうしたの?」

上を見上げたままの秀に気付いて、浜田が声をかけてくる。その声に、秀は目線を下に戻した。

「いや、いい天気だな、と思つて。」

「そうだね。」

浜田は太陽の光が眩しそうに、空を見上げる。つられるように秀も再び上を見上げた。だが、見ているものは違つ筈だ。

「おーい。今日は何する?」

大悟の声が広場に響く。皆の笑い声も。

この声が、泉に届けば良い。

そう、秀は思っていた。

4・秀

泉がボードに触らなくなつて、週間が過ぎた。今では放課後クラスメイトの女の子達と遊ぶようになつていた。

少しずつ、変わつていく。

段々と、泉も茜もスケートボードのことは口にしなくなつていた。毎日のように誘いに来ていた大悟も、

『女の子達と遊びたいの。』

泉がそう言つと、諦めてくれた。最近では泉を誘いには来ない。寂しかつたが、いつも悩んでいた毎日に比べ、安定した日々が続く。茜がどう思つているかは分からぬが、もう、聞こつとも思わない。後悔はしていない。

相談したわけではないが、茜と泉は下校する時、あの土手の上を通らなくなつっていた。それが茜も気にしてるといつ証拠だつた。

終業のチャイムが鳴り響く。

先生に挨拶をし、ランドセルを背負おうとして泉は放課後に委員会があることを思い出した。ランドセルを再び机の上に置いて、茜の元に行つた。

「茜ちゃん。今日委員会あるから、先に帰つていいよ。」

「うん、分かつた。バイバイ。」

「バイバイ。」

二人は互いに手を振つて別れる。ランドセルからペンケースを出し、同じ委員の男子と委員会が開かれる教室へと向かつ。

その教室のドアをくぐり、自分のクラスの席についた。その時、初めて気付く。

浜田が、同じ委員なのだ。

泉は6年3組。浜田は大悟と同じ1組。クラスが離れているおかげで隣の席に着くようなことはなかつたが、泉は自分の中の気まずさを誤魔化せず、表情が硬くなる。

一方浜田は泉を見ると、以前と同じ笑顔で泉に声をかけてきた。

「何だか久しぶりだね。」

全く変わらない浜田の様子に安堵しつつ、泉は笑顔を浮かべた。

「そうだね。」

後ろめたさが背中に張り付くように離れない。浜田がいつものように接してくれることが、余計にそれを大きくしていた。これ以上浜田と何を話せばいいのか分からず、目を逸らす。

その時、先生が教室に入つてきて教室が静かになる。そのまま委員会が始まつた。それに救われたように泉は配られたプリントに目を落とした。

(私は、悪い事しているのかな)

何もかもが嫌になる。

少し前までは、なんともなかつた時間が苦痛になる。

(何でこいつなつちやつたんだらう)

後悔はしない。きっととしてない。

泉は委員会の間、ずっと下を向いていた。

「何だ。また白崎はいないんだ。」

健一が漏らした咳きこ、西小のメンバーは疑問の目線を大悟に投げかける。それに気付いた大悟は苛ただしげに健一から目を逸らした。

「あいつも受験なのか?」

何気なく聞いた「リに、大悟はにべもなく答えた。

「ちげえよ。」

「じゃあ、どうしたんだよ。」

質問を重ねる、ひとつを、まるで自分のイリツキの原因であるかのように睨む。

「俺が知るか。」

そう言つと、大悟は皆の周りから外れて土手に座つた。

「どうしたんだアイツ？」

浩太が浜田の隣に歩いて来ながら質問した。大悟とゴリの喧嘩はいつものことだが、今田はいつもの喧嘩とは違う。それは仲間の誰の目から見ても明らかだ。

「白崎のことは僕らにも分からないんだよ。分からぬから、イラついてんじゃない？」

「分からぬって、会つてないのか？」

「会つんだけど、話したくなさそうなんだよ。」

「へえ。反抗期か？」

「なんだよ、それ。」

変な冗談を言いながらも、二人の顔は晴れない。それは他の皆も同じだ。

「今日はどうする？」

秀が、納得行かない顔で黙つていたゴリに尋ねた。

「さあな。」

「ちいさと田を合わせようとしないライバルを見つめながら、ビックリいと言わんばかりに西小リーダーは答えた。

（話をしに行きたいけど・・・）

秀は川べりの方へ行つて座る。ゆっくりと流れる川に日光が反射してまぶしい。ずっと遠くの空を見れば、厚い雲が空の端を覆っている。

(もうすぐ梅雨だな・・・)

そんなことをポツリと思う。梅雨に入ればこいつをつけて皆でここに集まることもなかなかできなくなる。

雨の降る時間の間に、白崎の問題が解決してくれればいい。時間による解決なんて曖昧なものを頼るのは、何も出来ない大人の言い訳だと思つてた。

結局、俺もその中の一人だ。

何もできない自分。

自分は子供だから何もできないのだろうか。
自分は無力だから何もできないのだろうか。
自分は何もできない。
自分は何もしてやれない。

仲間に、
友達に、

好きな人にはえ。

降り続く雨が人々の心を憂鬱にさせるのは、その音のせいだろうか。厚い雨雲によつて太陽の光を遮られた薄暗い空間のせいだろうか。湿気のせいでじめじめした空気のせいだろうか。それとも、雨の冷たさのせいだろうか。

外出を邪魔され、室内で遊ぶしかない子供達の多くは、家でTVゲームに夢中になっているのだろう。

もしくは一人自分の部屋で、本を読んでいるのかもしれない。

泉のようだ。

泉にとつてこの雨は、放課後に監と遊ばない為の都合の良い言い訳となつていて。その手にはもう何度も繰り返し呼んだコミック本が握られていた。

彼女は前に進む痛みよりも、その場に留まる仮初めの安息を選んでいた。

確かに留まれば何の苦しみも悩みもない。だが、一つも解決されずに苦しみも悩みも一緒に留まっていく。それは誰もがこれから学んでいかなくてはならないことだつた。他の誰でもない。自身の経験によつて。

ベッドに座つたまま、泉はずつとコミックを読みふけつていて。他の世界に逃れることはたやすい。だが、それもすぐに終わつてしまつ。

皆と会わないと安堵はあるが、例に漏れず、泉の気分も明るいとはいえない。元々の悩みに、梅雨が拍車をかけているのかもし

れなかつた。

「ハリックを閉じ、投げ出して、そのままベッドの上に仰向けになる。

段々と、一つの欲求が頭の中を支配していく。大悟達と一緒に遊べないことよりも、茜が本当の気持ちを話してくれないことよりも、もつと純粹で、幼い頃から持ち続けていた欲望。たつた一人ですつと。

泉は今、一人だ。

昔と同じようだ。

南小に転校する前の、あの頃のようだ。

(そうだ。)

泉は天井をじっと見詰める。

(あの頃に戻つただけだ。)

その日が、天井から離れていく。

(私は)

泉は起き上がつた。

立ち上がりてクローゼットの方に行く。

(ずっと)

(スケボーがやりたかっただけなんだ。)

泉は部屋を出た。

灯りが消され、誰もいなくなつた暗い部屋ではクローゼットの中に隠しておいた泉の緑色のボードは無くなつてゐる。いつも、壁のフックの上にかかつっていた帽子も。

朝から降り続ける雨の中、秀はいつもの土手を歩いていた。

今は浜田の家からTVゲームをして遊んだ帰りだ。時間はすでに夕方の5時を回っている。秀の家は浜田の家からは友達の中で一番遠い。友達とは別れた後なので、一人でこの道を歩いている。

この間までは穏やかだった見慣れた川も雨で増水し、水は濁つて勢いが増している。まるで別の川のようだ。雨のカーテンのせいでき、今日は川の向こう側ははつきりとは見えない。雨音と川の音が世界を支配する。

視界も聽覚も雨で一杯になり、狭い空間に閉じ込められたような感覚に陥る。

激しい雨のせいでも、傘をさしていても靴の中まで濡れている。歩く度に不快な感覚が足に伝わった。

ふいに、雨の世界を突き破つて聞こえる音があつた。

音のする方を見ると、薄暗い視界の中、いつもの広場で何かが動

くのが見える。それは、秀が見慣れた動きをしていた。

それは、その誰かはスケートボードをやっているのだ。

(雨なのに、誰だ?)

歩く速度を変えずに、秀はそれが自分の知っている者かもしれない、その人物の居る方を見ながら進んだ。

そのシルエットが段々とはつきりしてくる。少年だ。
帽子をかぶつている。

ボードの色は緑。

秀は立ち止まつた。その人物が誰であるか分かったからだ。顔ははつきりとは見えないが分かる。それは、何度も見たことのある姿だった。

秀はそこから一気に土手を駆け下りた。濡れているせいでも土手の下りは滑りやすく、秀は何度か転びそうになるが、勢いを緩めることがなくその人物の下へ走つた。

その人物は秀に気付いていない。

その人物と秀の距離は3~4mほどしかないが、雨によつて遮られた空間はまるで別世界のように一人の間に横たわつている。

秀はスケートボードを邪魔しない位置で立ち止まり、その人物をずっと見ていた。

どのくらい時間が経つだろうか。

その人物が滑るのを止め、振り返つた。

秀に気付く。

目が合つた瞬間、秀は反射的にその人物の方に歩き出していた。

「・・秀ちゃん。」

「風邪ひくよ。」

言つて、秀は傘を差し出す。それは『ぐ当たり前の、自然な行為だつた。ずっと聞きたかった言葉より先に出でいた。

傘の中に入れてやると、二人の間の距離が一気に縮まつた気がした。

傘の中といつ狭い空間。今度は雨が、一人と外界との間を遮断する。

秀は泉の顔を見る。だが、泉は下を見ていた。
二人の沈黙を一つの水音が埋め尽くす。

しばらくして、ゆつくりと泉が顔を上げ、雨音に隠れてしまいそうな小さな声で話し始めた。

「あたし・・・・・。」

秀は泉の言葉を待つてゐる。しかし泉は、耐え切れないようになたすぐに視線を下に落とした。

「あたし、スケボーがしたいの・・・。」

「うん。」

「もう、階と一緒でなくていい。一人でも・・いい・・の。」

泉から、嗚咽のような声が漏れる。それと混じつて、言葉が聞きづらくなつていく。

一つも言葉を聞き逃さないようにするかのように、秀はじつと耳

を傾けていた。じぱりくして、泉の口から泣き声だけが聞こえるようになる。

わへ、秀の耳に届くのは雨の音と泣き声だけだ。

薄暗い空は夜の訪れと共に、段々と空気を暗く染めていく。数の少ない川沿いの街頭は一人を光にむかすのを恐れているかのように、一人の所には届かない。

どのくらい、やうしていただろうか。

一人は並んでゆっくりとした足取りで帰路に着く。
二人の間に、言葉はない。

今を壊すことはないと思つかう。

思ひけど、恐い。

一人でも大丈夫。

それが分かつて嬉しかつた。

だからもういい。

一人でもやりたい」とはやるつと思えば出来るから。

だからもういい。

いのままで。

翌日も雨。出かけに見てきた天気予報によれば、今週いっぱいは雨らしい。今日は水曜だから、予報通りであれば後3日は雨が続くということだ。これでは、誰だって気が滅入ってしまうだろう。

靴は雨のせいで濡れて足は冷たいが、湿気のたっぷり詰まった空氣のせいで蒸し暑い。絶え間なく落ちてくる雨が空間を埋めて、何だか息苦しいような感じさえしてくる。

単純な大悟は気分を天気に左右されやすい。おまけに自分の好き

なことができないとなれば、機嫌は最悪だつた。

大悟は自分でも来週まで我慢していられる自信は無い。

雨が染みてきたせいで、歩く度に嫌な感触がする自分の靴音にイララしながら大悟は家に向かつて歩いていた。

学校でも、教室の中で遊ぶしかない。外で思いつきり遊びたい年頃の男の子にとって、この状況は実に退屈だつた。そこで工夫してノートとセロハンテープで作ったボールと、教科書を丸めたバットを使って、教室で野球をしていたが、ボールが教室で絵を描いて遊んでいた女子に当たつてしまい、案の定先生に言いつけられて今日怒られてしまった事も大悟の不機嫌に拍車をかけている。
踏んだり蹴つたりとは正にこの事だ。自業自得だとは分かつてゐるけれど。

そして、白崎がスケボーに参加しなくなつたこと。解決されないこの問題に、大悟はどうすることもできずにやり場のない思いを抱えていた。

大悟も責任を感じていたのだ。

自分の意地のせいで、無理矢理嘘をつかせてしまつたこと。きつと、それが嫌になつたんだ。

それとも、最初から俺達とは遊びたくなかつたのだろうか。
俺だつて女の中で一人遊ぶのなんか退屈だ。遊ぶんだつたら男と

の方が絶対楽しい。

白崎と一緒に遊びたいけど、嫌がつてゐるのが分かつてゐるからどうしようもない。

それが分かつてしまつて、大悟は更に気分を沈ませた。

なんだか傘を差すのがめんどくさくなつて、大悟は傘を閉じて走

つた。

すれ違う人々は、奇異の目で傘を片手に持つて雨に濡れながらかけていく小学生を見送った。何人もの人々を抜かして、大悟は家まで後10m程の所で声をかけられて止まつた。

「大ちゃん？」

立ち止まつて振り返ると、そこに居たのは茜だつた。
ピンクの傘に赤いランドセル、靴は濡れないように赤い長靴を履いている。

「何で傘ささないの？」

茜は大悟の右手に握られた黒い傘を見てそういった。顔には笑顔をたたえながら、自分の傘に大悟を入れてあげようと大悟の方に歩いてくる。

自分の身長よりも高い位置にある大悟の頭に合わせるように茜は少し傘を持ち上げて、大悟の上にかざした。

至近距離で見る茜の顔はいつものように笑っているが、何故かそれが癪に障つて、大悟は言葉を吐き出した。

「なあ、知つてんだろ？」

それを聞いて茜の笑顔が強張つた。その声が、自分の好きないつもの明るい大悟には似合わない、怒りに満ちた声だつたからだ。

戸惑う茜の返答を待たず、大悟はたたみ掛けた。

「何でだ？ なんで白崎は来なくなつたんだよ。お前友達なんだろ？ 知つているよな？」

「し、知らない。」

言葉短に茜は一步下がる。だが大悟に傘をかざしているせいであまり後ろには下がれず、大悟との距離はほんの少ししか離れない。

「何で知らねえんだよ。」

「知らないのは、知らないもん。泉ちゃんはそんな話しなかつたよ。何で私が怒られなきやならないの？」

まだ納得していないうつな顔で、大悟はそっぽを向いた。その態度に茜は胸の奥で何かが湧き上がっているのを感じる。それが何か分からないまま、じみ上げてくる苛立に言葉をのせて吐き出した。

「きつと、泉ちゃんは私達と一緒にの方が楽しいのよ。」「つるせえんだよ！」

その言葉を聞いて、大悟が怒りを吐き出した。これまで溜め込まれた苛立ちや不安を指摘され、茜を怒鳴りつけて傘の中から飛び出し、再び雨の中に身をさらす。

「何で・・・何でおー・・・んの？」

今にも泣き出しそうな茜の顔を見て、大悟はめんどくさうな顔をする。茜はそれに気付かず、一生懸命涙をこらえて下を向く。

「大ちゃんは・・・泉ちゃんのことが好きなの？」

その問いに、大悟はからかわれたと思つたのか、更なる怒りに顔を赤くする。

「ふざけんなー！」

大悟の叫びに茜ははじかれたように顔を上げる。大悟はそのまま茜のことを振り返りもせずに走りだした。

溢れ出した涙のせいでゆがんだ茜の視界の中で、大悟の後姿は段々小さくなつていいく。

それを見ながら、茜は小さく嗚咽を漏らす。我慢することを放棄した瞬間、茜の目からとめどなく涙が流れ落ちた。

冷たい雨が一人の間に壁となつて降り注ぐ。

大悟の姿はもう見えない。

それは二人の間の距離のせいかもしれないし、とめどなく溢れる涙のせいかもしだらなかつた。

「おーおー、どうなってんだよ。」

呆れた様な、怒った様な表情で、ゴリは不満を漏らした。

久しぶりに雨の降らない放課後。集まつたメンバーはいつもより人数が少ない。いつも真っ先にゴリに突つかかっていく大悟の姿がそこにはなかつた。

「何やつてんだよ、アイツは。」

今度ははつきりと苛ただし氣な顔をして、ゴリはあらぬ方向を見ながら吐き捨てた。

「ゴリは大悟とよく喧嘩をしているが、おそらく皆の前で本気で怒つたことはないのだろう。」

だが、今ゴリは怒りを露にしていた。
誰も彼に声をかけられないほどに。

「悪い。俺帰るわ。」

だから、ゴリがそう言つた時も誰も理由を聞きもしなかつたし、引き止めることもしなかつた。

「何なんだろうな。」

誰ともなくヤスが呟く。その言葉に、残された者達は声に出さず、相槌を打つた。

「お前何してんだよ。」

「ゴリは開口一番そう言つた。

彼は大悟の家の玄関に立つてゐる。その玄関のドアを開けたのは大悟だ。

その言葉に反抗しようとも口を開きかけたが、大悟は何も言えない事に気付いて口を閉じた。

「上がるぞ。」

しばらく大悟の言葉を待つてゐたが、何も言わなかつたのでゴリは自然に大悟の家に上がり込んだ。だがそれも当然だ。いつも皆の前では喧嘩ばかりだが、一人は幼馴染で、一番古いスケボー仲間なのだから。

今皆と一緒にスケボー出来るのも、一人の努力で仲間を集めた結果なのである。

大悟の部屋がある一階への階段を、「ゴリは何も言わずに上がつていく。そして勝手に大悟の部屋に入り、勝手にベッドの上に座つた。大悟もその後に続いて部屋に入り、自分の勉強机の椅子に座る。

今度黙るのはゴリの方だった。ゴリは大悟が自分に話し始めるまで何も言わない氣なのだ。それを分かつていても、大悟の口は中々開かなかつた。

数分後、大悟は親友に向かつて自分の話せることから、話し始めた。

「それで？」

「は？」

大吾は言った本人がそうと気付くくらい、間抜けな声を上げた。全てのことを話し終えた後に、こんな風に言われるとは思わなかつたのだろ？

一体ゴリが何を促しているのか分からぬまま、大吾はゴリの顔を見た。

「だから、お前は今何をしてんだよ。」

大吾は固まり、何を言つたら良いのか分からず、変な汗をかきながら何とか口を開く。

「いや、だから。俺はどうしたら良いか分かんねえから・・・」

「馬鹿じやねえのか。」

「は？ 何だよ！」

「ゴリの突然の罵倒に、何のことを言われているのか分からぬまま、今まで溜まっていたものが一気に飛び出したように大吾は大声を上げた。

「白崎一人が来ないのが何だって言うんだよ…あいつらは俺達が集めたんだぞ！その俺達がいなくてどうすんだよ！」

「俺は今それどころじゃねえんだよ…そつちはそつちでやりたい奴がやつてりゃいいだろ！俺のことはほつとけよ…」

「ふざけんな！」

「ゴリの手が大吾の襟首を掴む。ゴリは力任せに大吾の顔を自分の顔に近づけた。

「やつたる奴がやつてりゃいいだと…?…じゃあ、お前は違うのか？お前はもうやりたくねえってのかよ…」

大吾の顔色が変わった。ゴリの言いたいことを理解したが、その通りにできないことにも同時に気付き、どうしようもない思いがゴリへの怒りという吐け口を見つけて表に現れた。

「しょうがないだろ！あいつは仲間だぞ！ほつとけないだろ？が…」

それを聞いて、ゴリは大吾の襟を掴んでいた手を乱暴に離した。大吾はその反動で勉強机にぶつかつたが、すぐにゴリを睨み返した。ゴリは怒った様な、呆れた様な、大吾が今まで見たことの無い顔をしていた。

「ああ、そうかよ。ほつとけなくて、お前は白崎に何をしたんだよ。何もしてねえじゃねえか。お前はあれか？あいつに仲間に戻ってきてほしいわけか？」

「そうだよ。その何が悪いんだよ。」

「お前は、あいつにスケボーをやつて欲しいんじゃなかつたのかよ！」

「ゴリが今までに無いくらい大きな声で親友を怒鳴りつけた。その表情はいつもの生意気な笑顔ではなく、本当の怒りに満ちて、何か泣きそうにも見える。

だが、大吾は気付いたようだ。ゴリが本当に言いたかったことは何なのか。

大吾は氣の抜けた顔で再び勉強机の椅子に力なく座つた。まるで、糸の切れた操り人形のように。

「俺が何をしても無駄ってことか？」

「そうだよ。どんな時でも、お前のすることは一つしかないだろうが。それを忘れやがつて。」

言つて、ゴリも再び大吾のベッドの上に座る。

しばらく無言が続いたが、いつもの一人に戻っていた。いつの間にか外は夕暮れになつていて、オレンジ色の光が一人のいる部屋の空氣も外と同じように染めている。

しばらくして、ゴリが口を開いた。

「なあ、なんか食べるもんねえの？」

* * *

頭の中は真っ白だ。真っ白のままで、ただ滑り続けている。

日曜日。河原の空き地。しかし、いつも大吾達と一緒に使つてい

るような整備されたものではない。ここは人が使うための空き地ではなく、自然に草が生えずに土がむき出しになっているだけの場所だった。

いつもの場所とはかなり離れた所にいる。家からもかなりの距離があるだが、知り合いに会わないという面で便利な場所だ。特に、今の泉のように誰にも会いたくない時には。

知り合いには会わない場所だが、泉は帽子をかぶっている。他人が見たら、男の子と間違えるだろう。

誰の声も聞こえない空き地。そこにはただ、スケートボードの音だけが聞こえて来る。けれど、整備されていない空き地には石が多く滑りにくい。こんな所で滑っていてはすぐにボードが駄目になってしまうかもしれない。

泉の体は熱い。もうすでに2時間近く滑りっぱなしだ。体中汗をかき、足が痛くなっていた。だが、滑る事を止めてしまえば、最近あつた出来事が泉の頭の中を一杯にしてしまう。それから逃れるために、泉はひたすら滑り続けていた。

やがて音が止んだ。

ボードを片手に、泉は草の生えた土手の坂に川の方を向いて座った。息を整え、Tシャツで汗を吹ぐ。帽子を取ると、髪の中に空気が入り、顔全体に空気が触れる。

風が吹く。汗で濡れた体に当たると気持ちが良い。

「ふーっ。」

空見上げて息を吐く。

そのまま後ろに体を倒し、芝生の上に寝ころがった。
何も考えなくていい空間、時間。

(ずっとこのままだつたら楽なのに。)

そう思つた瞬間、また、頭の中が現実に埋め尽くされる。
大吾の事、茜の事、皆の事、自分の事、スケボーの事。
目を瞑る。答えは浮かんでこない。
目を開ける。眩しさに目がくらんだ。
視界が白くなる。ゆがんだ光が視界いっぱいに広がる。
泉の目には涙が溢れていた。

(スケボーがしたい。)

けど、何かが違う。もう泉には分かつっていた。秀に嘘をついたこと。
一人で滑つていて分かった。
だから余計に辛い。
分からぬ今まで良かつたのかもしねり。
だって、このままでいるしかないんだから。

いつもの空き地。

だが、そこでスケボーをやつているのはたつた一人しかいない。
深い青と緑のボード。健一だ。

最近、メンバーの集まりが悪く、あまり皆でスケボーをやつていない。だから健一は時々一人で此処に来て、滑つているのだった。

健一も最近皆で集まらない理由は知っている。南小の白崎と大吾が来ないからだ。白崎はともかく大吾が来ないことは、皆に大きな影響を及ぼしているらしい。

だが、健一は大吾よりも白崎が来ないことの方が重要だった。白崎は健一にとって技術でもタイムでも一番のライバルなのだ。

南小のメンバーに話を聞くと、白崎はスケボーを辞めたと言つ。

(あいつが辞めるわけ無い。)

健一はボードから降り、右手で近くのベンチに立てかけた。そのまま自分もそこに座る。上を向くと、空の眩しさに目を細めた。

健一も白崎と同じで、ここに来るまで一緒にスケボーをやるメンバーはいなかつた。だからこそ、ここで皆と一緒にスケボーをやる時間は他のどのメンバーよりも嬉しかつたし、楽しかつた。それは白崎も同じはずだ。

『ここに来れて良かつた。』

初めて健一と白崎が勝負したあの時、確かに白崎はそう言つていた。今までスケボーを制限されていた分、白崎がスケボーを辞めるなんて有り得ない。

(でも、ここには来ない。)

眩しそうに慣れるといつまでも空に浮かぶ雲が描く白い模様を見ながら健一は考えていた。

(でも、せつと辞めていない。)

一匹の鳩が健一の上を通り過ぎる。

「…………」

その時、本当に何の脈絡も無く突然思いついた。

(なら、)

どに見ているのか分からぬ田で、健一は立ち上がる。

(どつか、他の場所でやつてんじやないのか?)

健一はボードを掴むと一旦散に右手の坂の上を駆け上がった。一番上の舗装された道に出ると、ボードを置き、左足を乗せて、右足を蹴った。

勢い良く健一のボードが左手の上を滑る。

いつの間にか、いつもの空き地は遠ざかっていた。

ふと気がついて帽子を取ると、田の前は赤く染まっている。川の方へ目を向けると、傾きかけた太陽が大きく、赤くなっていた。その光は目に映る全てのものを赤く照らし、今までとはまるで違う世界に変えている。

あらからずつと滑り続けていた泉はベンチに置いていた帽子を取り、ボードを持って家路に着こうとした。

その時、泉が背を向けている土手の方から声がかけられた。

「白崎！」

思わず泉は振り返りそうになる。だが気付いたとたん、体が硬直したように動かない。心臓の音だけが自分の耳に残り、冷たい汗が体中に張り付くのを感じた。

泉は今帽子を取っている。

今の声は確かに男子の声だった。だが、誰の声までかは分からなかつた。

振り向くべきか、無視するか。

「白崎？」

もう一度声が聞こえた。

今度は分かつた。知っている声だ。

泉は安堵して、振り向いた。その声は秀の声だったからだ。

泉の目の前、土手の上には秀がいた。秀は片手で自転車を支えている。恐らくここまでそれで来たのだろう。秀の顔には汗が浮かんでいた。その表情は複雑な顔をしている。

秀は何も口を開かない。

泉にもその理由がすぐに分かった。

秀の隣、深い青色のスケートボードに乗った少年。

健一だ。

健一は秀よりも汗だくの姿で、その場に立っていた。健一も口を開かない。相変わらず長く伸びた前髪で、その表情は読み取れない。

その時泉はやつと気付いた。

最初に「白崎」と呼んだのは健一だったのだ。

泉は振り向いたことを激しく後悔すると共に、今の状況に困惑していた。答えを求める為か、それとも健一と田を合わせられない為か、泉は秀に向ける。

秀は健一には田をくれず、すぐに自転車をその場に置き、土手を駆け下りて泉の元に走ってきた。

だが、誰よりも先に口を開いたのは健一だった。

「白崎？」

泉は健一には田を向けず、助けを求めるように秀を見つめる。それを見て、秀は健一に聞こえないくらい小さな声でさわやかに。

「どうする？」

その言葉に、泉は泣き声になってしまった。

「誤魔化すなり話を合わせる。」

秀は動搖してくる泉と対照的に、真っ直ぐに泉の眼を見た。
そんなやり取りに気付いていない健一は、何も考えずにボードを手に持つて左手を降りて来た。

「お前白崎だろ？」

健一は泉の正面に来た。泉はもつ健一を無視することができない。
泉は思い切って健一の顔を見る。

秀は健一に向かって何か言おうとしたが、それより先に泉が口を開いた。

「そうだよ。」

秀の顔が驚きの表情に変わる。

泉は表情を変えず、真っ直ぐ健一の顔を見ていた。心臓は信じられないほど速く振動し、自分がどこを見ているのか曖昧な気さえしてくる。しかし、後悔はしていなかつた。それはきっとわざの健一の態度が、まるで普通の友達に話しかけるのと変わらないものだったからに違いない。

健一が返事をするまでの時間がとても長く感じられた。泉に見える健一は、ゆっくりといつもの笑顔を見せて言った。

「やっぱつな。最近はここで滑つてんのか？」

「あっ、・・・うん。」

「そつか、じゃ俺もここに来ようかな。」

「えつ？ なんで？」

「だつて、『リ達』さんとスケボーやらねえんだもん。」

「そうなの？」

健一の言葉に驚き、泉は秀を振り返る。泉と田の合つた秀は気まずそうな表情になる。

それを見て、泉は嫌な予感がした。だから、もう関わるのは止めようと思いつながらも訊かずにはいられなかつた。

「どうして？」

「・・・最近、集まれる人数が減つたから、あんまり皆で集まつてやらなくなつただけだよ。」

「減つた？ 来なくなつたのは・・・私だけじゃないの？」

「後、強哉と・・・大吾が。」

「大ちゃんが？」

(何で?)

そう顔で訴える泉に秀は無言で答える。一人の氣まずい雰囲気に健一は口を出せずにいた。

「大吾も理由は言わないので、多分きっかけは白崎だと思つ。」

「・・・私？」

どうして？ どうしてそくなつてしまつたんだ？ 自分が居なくたつて皆には何の支障も無いと思つてた。

動搖する泉を見て、秀は健一の様子を気にしながらも口を開いた。

「あくまで予測だけど、大吾は・・・。白崎が来なくなつた原因は自分だと思つてるんだ。」

「え？」

「・・・自分のせいで、嘘をつかせてしまつた事。後悔してるんだと思ひ。」

「そんな――！」

大ちゃんのせいじゃない。そんなの全然違う。私はスケボーをやりたかった。あれはその為の嘘だつたんだから。大ちゃんの為じゃない。自分の為の嘘だつたのに。

泉の目に涙が浮かぶ。それを辛そうに秀は見つめる。健一が居なければ、多分泉の事を抱きしめていた筈だ。

自分の好きな女の子が苦しんでいる。自分を責めている。そんな時、どうしてやればいい？どうするのが正解なんだろう。

秀はそれ以上何も言つ事が出来なかつた。

「嘘？嘘つて何だ？」

事情を知らない健一は、呆けた顔でそう言つた。泉と秀は思わずお互いの顔を見る。けど、秀に頼つていてはいけないと、泉は健一に向き直つた。

「・・・ごめん。今まで女子だつて事、黙つてた。」

「あ、ホントだ。女子だ。」

意外にもあつさりと、健一はそう言つた。

「え・・・。」

「あははははは。マジだ。そりこや、何で今まで気付かなかつたんだわいな。」

あつからかんと、笑う健一に泉は呆然と言葉を失つてしまつ。

「カビ、ロードやつてんなひ箇と一緒にやればいいじゃん。てつき白崎も受験で勉強しているのかと思つたぜ。」

「あ・・・、えつと、だから・・・。」

女子であることをあつさうと受け止められ、泉はなんと言つたらいいのか分からなくなつてしまつた。だつて、箇と一緒に居られない理由を健一は笑い飛ばしてしまつたから。それが理由だなんて言うのは、健一には通じない気がした。

上手く説明できずに言葉を詰まらせる泉を見て「まあ、ここや。」と健一が笑う。

「来週は絶対来いよ。白崎いねえとつまんねえし。」

「でも・・・。」

「な?」

健一の満面の笑顔。それだけで、泉の心は軽くなつた気がした。今まで悩んでいた事がどこかに行つてしまつたようだつた。

「・・・うん。」

涙が零れそうになる。

この涙も、健一がどこかへ吹き飛ばしてくれたらいいのに。

泉は健一につられてるよつに、小さく笑つた。

その隣で、秀は複雑な気持ちを抱えていた。出来れば白崎の悩みは自分が解決してあげたかった。今まで自分はその悩みに気付いていても、何もしてあげられなかつた。

けど今、健一がいとも簡単に泉の悩みを溶かしてしまつた。泉が前向きになつたのならそれは喜ぶべきことだ。でも素直に喜べない自分もいる。

こんなのつまらない嫉妬だつて分かつてる。

(ちえ・・。)

秀は泉と健一の後ろ姿を追いながら、自分も土手をあがつた。早く自然に、その隣に立てるようになりたいと思ひながら。

8・笑顔

「お、今日は随分機嫌がいいな。」

浩太にそう言われ、土手のベンチに座っていた健一は自分の心臓が大きく鼓動するのを感じた。

「え！？ そうか？？」

「何かあつたのか？」

「いや、別に・・・。」

「ふーん。」

何とか誤魔化すが、自然と顔が緩みそうになる。だつて今日は白崎が来ると約束してくれた日だからだ。久しぶりに白崎と一緒にスケボーが出来る。それが何より嬉しかった。

(それに・・・)

初めて白崎の顔をまともに見たあの日から、健一は彼女の顔が忘れられずにいた。

夕日に照らされた彼女の笑顔は、自分が知っているどの女子よりも魅力的に見えた。

それが、特別かどうかはまだ分からぬけれど。

土手には徐々に仲間が集まりつつあった。その中にまだ白崎、大吾、浜田、秀の姿は無い。

「お、来たな。」

「リの一言に、健一は顔を上げた。すると浜田と久しづりの大吾の姿がある。

「おー、大吾じゅん。」「久しづりー。」

各々仲間達に声をかけられ、大吾は気まずい光景を照れくさそうな表情で、「おう。」と短くそれに応えた。ヤスが周りを見渡す。

「後は、秀か。」「へえ。秀が遅いなんて珍しいな。」

その言葉に、健一は土手の上を見上げた。

(白崎も来る筈なんだ。)

心の中で早く来て欲しいと祈る。きっと来る。だつてあの日約束したんだから。

すると、浜田がのんびりとした声で川に架かる橋を指差した。

「ねえ、あれって秀ひやんじやない?」

皆が橋を見上げる。確かに秀が自転車で橋を渡りこむ方向かっている。そして、その後ろには女の子を乗せていた。ヤスが口笛を吹いた。

「へえ。女連れじゅん。彼女?」

秀に彼女がいるなんて情報を聞いたことの無い西小のメンバーは

皆首を傾げる。けれど、健一だけがそれが誰か分かつていた。

(白崎だ!!)

「おい。健一?」

浩太の言葉にも答へず、健一は土手の上へ駆け出した。すると秀の自転車が段々と近づいてくる。止まると、丁度一人が土手に着いた所だった。

「よお。」

健一が声をかけると、「『めん。遅くなつた。』と秀が答える。そして、自転車から降りた泉は無言で健一の顔を見た。今日は帽子を被つておらず、長い髪は高い位置でお団子にしてまとめている。服は控えめに花柄がついた白いTシャツにデニムのハーパンツ。どこからどう見ても女の子の格好だった。

「おせえよ。」

「・・『めん。』

小さな声だったが、泉の顔は笑っていた。それを見て、健一は満面の笑顔を見せる。

「いーよ。早く行こ。」

三人が土手を降りてくると、西小メンバーは怪訝な顔になるが、南小のメンバーは驚き表情で泉の元に集まつた。

大吾が真っ先に口を開こうとして、それに失敗する。第一声をな

んと声をかければいいのか分からず、言葉を詰まらせたのだ。その様子を見て、浜田が笑顔で声をかける。

「久しぶりだね。」

「うん。・・その、ごめんね。」

「うん。僕達こそごめん。今までずっとそんな格好してこなかつたもんね。来辛かつたでしょ？」

「浜ちゃん・・・。」

他のメンバーも謝ってくれた。自分なりにそれぞれ泉のことを気にしていたのだ。それが分かつて、早くこうしていれば、皆と話していれば良かつたと思う。

「白崎！」

「大ちゃん・・・。」

それまで黙っていた大吾が声をあげた。

「俺、ホントに・・・。ゴメン・・。」

「うん。」

泉も慌てて首を横に振る。

「違うの。皆が悪いんじゃなくて、・・・その。私が・・・。ちゃんと、こうしたいって今まで言葉に出来なかつたのがいけないの。だから気にしないで。」

「悪い！俺ちゃんとあいつらにも話してくるからーー。」

そう言って、大吾は呆然としていた西小メンバーの方へ駆け出した。

「待つて！」

泉も、そして他のメンバーもその後に続いた。

大吾は頭を下げて西小の仲間にこれまでのことを説明した。すると、「ゴリが睡然と言葉を失っている。

「は？・・・・・白崎？？」

「「めん・・ね・。あの、私・・」

「いや、ちょっと待て！！」

「ゴリは両手で頭を抱えて泉から目を逸らす。なにやらブツブツ一人事を言つてるので、他のメンバーは無視して泉に声をかけた。

「マジ全然気付かなかつたー！」

「なんだよ。最初つからそう言つてくれれば良かつたのに。」

「あの、ごめんね。」

「いいつて、全然。あ、ゴリは気にしなくていいから。」

まだゴリは隅で一人頭を抱えていた。

心配そうにそれをみる泉に、秀が笑つて声をかける。

「ゴリは頭が固いんだよ。ほつとけば平氣。」

「うん。でも・・。」

「そんなことより、久々全員集合なんだから早くやるーゼー！！」

我慢できない、という様に健一がゴリに向かつて叫ぶ。表情の硬かつた泉は思わず笑みをこぼした。

土手に着いた時もそうだ。健一が笑顔で迎えてくれなかつたら、勇気が出なかつたかもしれない。

それに、秀が自転車で迎えに来てくれたから、まっすぐに皆の下へ向かう事が出来た。

泉は健一と秀を見た。

「秀ちゃん。健一。」

呼ばれた二人は同時に泉を見る。

「ありがとう。」

泉は笑顔で心からの感謝を言葉に込めた。一人にとつては今まで一番の泉の笑顔。

「うん。」

そう短く答えた秀に対し、健一は言葉を失っている。

「健一？」

泉が一步近づき顔を覗き込むと、健一はハツ、と息を飲んで後ずさりした。

「どうしたの？」

「べつ……べつに……！」

するとそれを見ていた浩太が、ニヤリと意地悪な笑みを浮かべる。さつと健一の後ろに回つてむと、彼の腕を抱えて動きを封じた。

「あーおいーーー！ 浩太何すんだよー！」

「何？ 健一、照れてんの？」

「ばつかーちげえよーー！」

それに段々と皆も加わつてくる。

「そういや、健一の前髪つて鬱陶しいよな。」

「そうそう。よく顔見えないし。」

「んなーーそんなの今は関係ねえだろーー！」

それに大吾も加わつて今度は健一の足を押された。

「あ、コラーー大吾ーー！」

「浩太そのままでいろよーー！」

「任せろーー！」

「ちょ、お前らーー！」

浩太と大吾の二人に抑えられ、健一は身動き出来なくなる。びっくりして泉がそれを見ていると、ヤスが隣に立つて泉に話しかけた。

「白崎。ちょっと健一の前髪上げてみ？」

「ばかーーふざけんなーー！」

確かに今まで表情の見にくかつた健一の顔には皆だけではなく、泉だって興味がある。

健一に悪いとは思いつつも「「めんね。」と言つて、泉は健一の

顔に手を伸ばした。そしてちぢみと汗ばんでいる額からそつと前髪をすくい上げる。

1

前髪に隠れていた健一の顔は、真っ赤に染まっていた。

それを見て、一斉に皆が笑い出す。その反応に更に健一は顔を赤くした。

「テメエらー覚えてるよー！」

「あははははっ！ 何？ もしかして、健一って赤面症？」

皆の笑い声が川原に響く。手足を開放された健一は皆に笑われ、すっかり機嫌を損ねていた。

泉はそことその間に移動して、顔を彫き込む

「うむ。」

よほど恥ずかしかつたようで、健一はそっぽを向いてしまつた。
大吾は腹を抱えたまま一人を見る。

「まーまー、いーじさん。これでもつ俺達の間に秘密はないってことだ。」

皆が泉を見る。泉は改めて皆に頭を下げようとした。けど、それを健一が止めてくれた。

「もういいんだって。おあい」。

「うん。」

ああ。心が温かくなる。

素直になつて良かつた。皆と一緒に居たいんだって、スケボーがやりたいんだって。行動に移して良かつた。皆が受け入れてくれた。許してくれた。

皆の笑顔を見ていると、親友の顔が浮かぶ。

大丈夫。茜だって話をすればきっと元に戻れる。分かつてくれる。

自然と表情が笑顔になる。皆と居れば自信が持てる。

「皆。ありがとう。」

必要なのは謝罪じゃなくて、感謝の言葉。

そして笑顔。

皆が、泉の笑顔に釘付けになる。思春期の男子にとって、心からの女子の笑顔は少なからず、心に響いたらしい。

皆の反応を見た秀は、思わず泉の隣に進み出た。そして泉の肩に手を置くと、その体を自分の方に引き寄せる。

「じゃあ、俺も秘密を話すよ。」

「え？」

きょとん、と自分の方を見上げる泉の顔に秀は満面の笑顔を向ける。

「俺、白崎のこと狙つてゐるから。手を出さないでね。」

えーーーーと皆が一齊に驚きの声を上げる。泉は驚きのあまりに声も出なかつた。

秀がちらりと健一を見ると、真つ赤だつた顔を青くして言葉を失つていた。

それから三十分後。河原では少年達の声とスケートボードの音が休みなしに聞こえている。その中に一人、少女の姿もあつた。

少年も少女も笑顔が耐えない。汗だくになりながら、それも気にせずには走り続けている。

少女はタオルで汗を拭きながら空を仰いだ。

もうすぐ一年で最も暑い季節が訪れる。そんな予感をさせる真つ青な空だつた。

完

8・笑顔（後書き）

『きみとスマイル』を最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

何故、小学生が主人公なのかといつと、橘が小学生の時に考えたお話だからです。

小学生が主人公の話なんて読む方はいらっしゃらないんじゃないかと思いましたが、杞憂に終わりほっとしております。

彼らの恋の行方には結論を出さずに物語は完結しましたが、別の形で続編をご用意しております。結末が気になる方は別小説『神様の失敗談 第二話』を御覧いただければ幸いです。

誠にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0107j/>

きみとスマイル

2010年10月9日03時55分発行